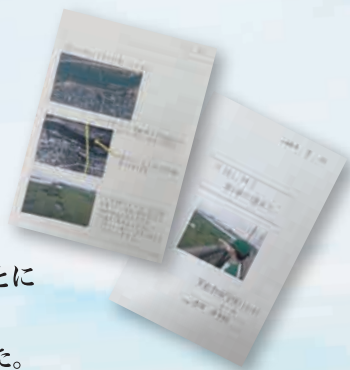


僕がみつけた戦争遺跡

70年も前の爆弾の跡が今も河川敷に残っていることに驚き調べた自由研究『大阪に残る戦争の傷あと』。写真と資料を駆使した労作を持って河川敷を訪ねた。



東淀川区在住の中学1年生、西田幸多朗くん(13)は昨年、淀川河川敷で見つけた巨大な池に興味を持ち、学校の自由研究課題としてこれらを調査した。「元はお父さんが見つけた池だったんですが、調べているうちに面白くなって」という西田くんが手にするのは「大阪に残る戦争の傷あと」と書かれたレポート。現在の地図と戦後間もなく米軍が撮影した航空写真を照らし合わせ、その正体が爆弾によってできた穴だということに気づいた。同様の穴、通称「ぼくだん池」は菅原城北大橋下など河川敷に多く残っている。空襲時に輸送路を断つため鉄橋などに多数の爆弾が落とされた穴に水が溜まりできたという。



これを、実際に当時中学1年生で体験した坂上貞夫さん(83)に見てもらおうと河川敷で待ち合わせた。70年前の中学一年生と現役の中学一年生のご対面だ。「爆弾でできたすり鉢状の穴に人がぎょうさん落ちていたんですよ」と語る坂上さんの話を、西田くんは真剣な表情で聞いている。



橋の上からぼくだん池を眺めながら西田くんは「爆弾が落ちた時の音は? においは?」と質問を重ねる。「においは分からんなあ。6月7日はたしか曇りやったと思うんやけど、焼夷弾が落ちた後は熱風が空に上がって黒い雨が降るんよ」と答える坂上さん。



自分と同じ中学一年の時に坂上さんが見た光景にふれた西田くんは「意外と知らないことが多くてびっくりしました。戦争のきずあとを次の世代に伝えないといけませんね」と戦争の記憶の大切さを感じた様子。戦争をその目で見てきた世代から、本やインターネットでしか知らない世代へ。記憶のバトンはこうして受け継がれていく。

坂上貞夫さんと西田幸多朗くん

西田くんの小学校6年生の時のレポートに驚く坂上さん。「分かります。立派なガイドになれるんとちゃいますか」とのおほめの言葉も。

